

第三話 三年後

長かった猛暑の夏もようやく終わり……が見えたような見えないような残暑の中、それでも律義に夏休みを終わらせ平常営業に戻った、都内の私立大学の正門前。

「詩羽あ～！こっちだってば～！」

「英梨々……？」

門から出てきた、思わずその後ろ姿に見惚れてしまう程の黒髪の美女を、周囲の皆が振り返るほどの大声で呼び留めたのは、こちらもまた、その日本人離れした美貌に衆目が集まるほどの金髪の美女。

多分、このSSを読んでいる方々には今更だけれど、一応紹介しておく
と、黒髪美女の名は、霞ヶ丘詩羽……またの名を、霞詩子。

早応大学四年生にして、小説やゲームシナリオ、映画の脚本すらもこなす売れっ子作家。

そして金髪美女の名は、澤村・スペンザー・英梨々……またの名を、柏木エリ。

多々良美術大学三年生にして、小説の挿絵やゲームの原画等で多忙を極める人気イラストレーター。

なお、第二話で説明を割愛しましたが、二人が互いを名前で呼びあうようになった経緯は……原作『冴えない彼女の育てかた GS3』を参照願います。

「講義終わったんでしょ？ 乗って乗って」

「どうしたのこの車？」

と、それらの諸事情はともかく、車の運転席から手招きする英梨々のもとに近寄った詩羽は、その、威風堂々たるイギリス製の高級車を、訝しげにまじまじと見つめる。

「パパがちょうど出張でイギリスに戻ってて、誰も使わないから借りてきたのよ」

「下手すると国際問題になるわよそれ……」

いや、詩羽が見つめていたのは車そのものではなく、そのナンバープレートに刻まれた、威風堂々たる『外(外交官ナンバー)』の文字だった。

なお、英梨々はそのミドルネームが示す通りハーフなのだが、父親がイギリスの外交官なので何ら不思議なことではない。不謹慎なことではあるけど。

「そういう細かいことはいいのよ！ それより、ちょっとドライブがてらご飯でも食べに行かない？」

「それはいいけど……英梨々、あなたいつの間に免許取ったのよ？」

「先週」

「え？」

「先週」

「……………」

「結局、夏休み最終日までかかっちゃったけどね……ほんとと融通きかないわよね自動車学校って。停止線ちょっとはみ出ただけで一発アウトとか！」

「ちょっとお！ なんでドア開けておきながら乗らずに歩き去るのよ！ 危ないでしょ」

「このままあなたが運転する車に乗る方が危ないと判断しての行動なん

けどわかっていただけないのは残念だわ」

※

※

※

「劇場版アニメ、調子いいみたいね」

ガチガチの街乗り、右往左往のインター合流を経て、低速巡行のまま高速道路に入り。

ようやく運転操作が減ったことで落ち着きを取り戻した英梨々は、今まで緊張のあまり真一文字に閉じていた口を、ようやく開いた。

「らしいわね。一応、来週から上映館が増えるって町田さんが言ってたわ」

そして詩羽も、英梨々が口を開いたことで、両手で力いっぱい握っていた手すりをようやく離した。

そうすると、互いの口に上るのは、半月前に公開された、自分たちが原作を務めた作品の劇場版アニメのことになるのは自然の流れで。

「そりゃ、ま、原作者と原作イラストレーターが直接関わってるんだし、当然よね！」

「……それでも、二人とも関わってなかった実写版の興収を抜くのは至難の業らしいけれどね」

「……言わないでその話は」

タイトルを『世界で一番大切な、私のものじゃない君へ』というその作品は、霞詩子、柏木エリの黄金コンビの三本目……いや、世間的には二本目の作品で、

不死川書店の敏腕編集長、町田苑子が陣頭指揮に立ち、発売当初から大規模なメディアミックス戦略のもと送り込まれたこの作品は、今までのファン層とは異なるターゲットにまでアプローチし、オタク誌やサブカル誌のみならず、女性誌、ファッション誌でまで特集されるほどの人気ぶりを博した。

「言っておくけれど、私、実写の方は最初の顔合わせに出たっきり、その後は一切ノータッチだったわよ？」

「別にあんたを責めてる訳じゃないわよ。どっちかっていうと試写会の席で人目もはばからず大爆笑してた紅坂朱音の方が酷いし」

「あの試写会の後、暴れ出しそうになる町田さんをなだめるのに大変だったのよ。原作者が編集長をフォローする構図っておかしくないかしら？」

「あんたも大人になったわねえ。一昔前なら始まって五分で席を立てててもおかしくない出来だったのに」

「それよりも一番の問題は、身内が皆そんな評価なのにもかかわらず、あの実写版がメディアミックスで一番売れているという厳然たる事実よ……」

「はああああ〜」

……と、まあ、そうやって一般層にまで広く浸透したために、恩恵のみならず弊害もあますところなく享受したのは、痛し痒しといったところだったけれど。

「ま、まあ、それはともかく！あたし実はこの前映画館にも行ったけど、女の子たちも半分くらいは泣いてたし、評判じゃ絶対実写版に負けてないわよ！」

この、霞詩子が初めて女性をターゲットに、しかも“悲恋”をメインテーマに据えた『世界で一番大切な、私のものじゃない君へ』は、彼女の一番メジャーなファン層である『純情ヘクトパスカル(アニメ含む)派』からは、『変節』だの『裏切り』だの『所詮ラノベは腰掛けかよ』だのと散々叩かれ、一番にわかファン層である『フィールズクロニクルXIII派』からは、『新境地!』だの『別に……』だのと、そこそこ冷静に受け止められ、一番古参でかつ過激なファン層である『恋するメトロノーム派』からは『これだよこれ!』だの『霞詩子の本質はだなぁ(以下長文)』だのと、熱狂的かつ排他的に受け入れられ……って君らめんどくせえよ中良くしようよ! というくらいに多彩な評価を得た。

「私の書いたものが女性に受けるなんて、意外だったけれどね……」

けれど、それらの論争は本質ではなく、町田編集長の狙い通り、今まで彼女の作品が届いていなかったファン層……中高生女子に劇的に届き。

「別に意外でも何でもないわよ。だって、あんたって基本、乙女なんだから」

「なんだか随分昔に投げたブーメランが返ってきてるような気がするけどまあいいわ」

今や霞詩子のサイン会の参加者は、以前とは違って、女性比が過半数を大きく上回り。

その多数派な新規ファンたちが、目の前に座っている黒髪美人な『恋愛のカリスマお姉さま』を取り囲み、うっとりした熱い視線で見つめるという華やかな光景が繰り広げられるようになっていた。

「今までのあんたは、それを、たつた一人の男のために書いてただけ……だから、男性受けが良かっただけ」

「……………」

……それでもまだ、彼女は、その輪の中から、その輪にそぐわない、眼鏡にリュック姿のおタク(ただし特定の)を時々探している自分に気づいていた。

「そんなあんたが、その乙女思想を素直にだだ洩れさせれば、こうして女子の共感を集めるのは当然よ。何しろ、負け犬の心理描写がとっても秀逸だしね」

「いいモデル(英梨々)がいたから、だけれどね？」

「とにかくっ! そんなあんたのおかげで、あたしも新境地が開けた」

相変わらず、効果的に反撃をしてくる親友の毒舌を、ちくりと食らいつつも受け流し。「というより、また新規ファンが増えた。感謝してる」

それでも英梨々は、強い視線で前を向く。

まあ運転に対しての激しい緊張は差し引きつつも。

「これで、紅坂朱音を倒す足がかりが、一つできた……」

「まあ確かに、あの人、この方面の客層“だけ”はいないわよれ」

「あいつの作品って、基本、カッコいい男が活躍するか、カッコいい女が活躍するかの、とっちかしかない」

「まあしょうがないわよ。彼女、永遠に強さを追い求めているから」

「だからこそ、そこがあいつの“弱さ”なのよ……」

尊敬する師匠への、許されざる仇敵への、憧れの先輩への、乗り越えるべ

き宿命への、下剋上を誓って。

「ま、とにかくこれで、この作品も一段落ね」

「そうね。何だかんだ、劇場版で奇麗に終わったし」

「劇場版“アニメ”でよ……表現は正確にね？」

「……だいぶまだ根に持ってんのね」

「で、次は何を作りましょうか？ 英梨々」

「次、かあ……」

「今の私たちは、紅坂朱音に対抗できる、ささやかな武器を、やっとひとつ手に入れたに過ぎない……」

「それは、まあ、そうね」

「だから次は、武器をさらに増やすか、それとも、この一本を鍛えるか、決めないと」

「……そろそろお腹すいたわね」

と、英梨々は、いつの間にか慣れた運転操作を見せ、インターへの出口に向かいスムーズに車線変更をした。

※

※

※

「まさか、ここに来るとはね……」

「懐かしいでしょ？ 特に詩羽にとっては」

高速を降りて、海沿いの食堂で海鮮たっぷりの食事を堪能した後も、英梨々の車は東京に戻る進路を取らなかった。

エンジンを掛けるとすぐ、少し考えるそぶりを見せ、『ちょっと海、見にいかない？』と、今でも海が見える道を、さらに西や南へ走り。

そして辿り着いたのは、伊豆半島の小さな海岸……熱川だった。

「覚えてる？ あんたが倫也の目の前で紅坂朱音に叩き潰されて、惨めに落ちぶれてボロボロ泣いてた場所よ」

「またそういう劇場版でしれっと飛ばされたエピソードを……」

「うっわ、冷たっ！」

そんな詩羽の愚痴っぽい謎の述懐などどこ吹く風で、英梨々は素早く裸足になると、波打ち際へと駆け出し、その白く跳ねた飛沫をばしやばしやと踏みつける。

「今はもう秋、誰もいない海ね～」

「時々思うけれどあなた本当はいつの生まれよ」

時代背景はともかく、まだ十分に泳げそうな残暑の海岸には、それでも彼女たち二人以外の姿はなかった。

「そっか、こっちの海岸って東側だから、海に沈む夕陽は見られないわね」

「そもそも女二人で海に沈む夕陽見てどうしようっていうのよあなたは」
すでにかなり西に傾いた夕陽は、海の反対の山側に、その姿を隠そうとしていた。

「ねえ、あんたも来なさいよ～！ 気持ちいいわよ？」

「いいわよ私は」

と、英梨々のあまりのハイテンションぶりを咎めるのを諦めた詩羽は、砂

浜に座り込むと、相変わらず波打ち際を行ったり来たりする相棒をぼうっと眺める。

夕陽の直射日光と、波打ち際の反射光を受け、キラキラに輝く金髪と白い肌。

二〇を超え、とっくに“女性”と表現すべきなのに、その華奢な身体と、幼さの残る人形のような繊細な顔つきの英梨々は、詩羽の目から見ると、まだ儚げな“少女”のままだ。

……まあ一部の部位に関することだけではなく、全体的に見ても。

「せっかくの海よ？ キ〇ンレ〇ンのCMみたいに弾けなさいよ！」

「できる訳ないでしょう？ というか、そもそもあなただってそういうタイプじゃないでしょうに」

「え～、あたしは高校時代、あんたほどくら～く鬱々としてなかったわよ？」

「そうよ、私は暗く鬱々としてたの。だからそんな、卒業式で泣きながら抱き合っ『卒業してもズッ友だよ』とか誓いつつも大学に入ったら連絡すら取らなくなる薄っぺらい青春の友情とかとは無縁なのよ」

「確かにあんたって、ほんの一部の人間と深く付き合う事しかできなかったわよね……友達も、男も」

いつまで経っても誘いに乗ってこない詩羽に、英梨々の方も諦めたかのように、その所作と口調を落ち着かせると、さく、さくと砂を踏み、座ったままの相棒にゆっくり近づいていく。

いや、テンションを下げた本当の理由は、相手の態度に合わせたからではなく……

「実はね、かなり大きな依頼が来てるんだ。

町田さん(不死川書店)でも、紅坂朱音(紅朱企画)でも、マルズでもないところから……」

最初から、この話をするための、長い長い段取りだった。

「詳しくは言えないんだけど、『フィールズクロニクル』並みのプロジェクトで、最初からメディアミックス前提で、その全部にメインに関わらせてくれて、だから最低でも、三～四年は拘束される長い仕事で」

「別に驚かないわよ……今の柏木エリに、その規模のオファーが届かないなんて方がおかしいもの」

「でも、でもね……本当に、すごく大きなプロジェクトなの。長く続くかもしれないプロジェクトなの。そして、そして……」

英梨々の告白は、その内容だけを見ると、壮大で、前向きで、明るい希望に満ち溢れていて……

「……完全に、あたしがメインなんだって。あたしありき”なんだって”

なのに、その口調だけを見ると、不安げで、心細げで、先の見えない未来に怯えていて……

「でもあたし、あんたと同じでほんの一部の人間と深く付き合う事しかできなくて、だから今まで、知り合い以外と仕事したことなくて……最初は個人サークルだったし、次は倫也と一緒にだったし、その次はあんたと一緒にいてく

れて……」

「英梨々……」

「また次の作品でも、一緒にいてくれて。二人の力で、映画化もされるヒット作を生み出せて。紅坂朱音がいなくても、いいものが作れるって信じさせてくれて。いつか、紅坂朱音を超えられるって、信じさせてくれて」

「それは……」

「……あんたと、詩羽と、一緒なら」

英梨々の、その、悲痛にも見える独白を……

詩羽は、多分、相手以上の葛藤を抱えたまま聞いていた。

詩羽が指摘した通り、柏木エリに、今まで以上の大きな仕事に来るのは、もはや当然のことだった。

『フィ|ルズクロニクル XIII』と『世界で一番大切な、私のものじゃない君へ』の立て続けのヒットにより、彼女の絵そのものと、そのタッチは、業界にあっという間に波及し。

イラストレーター界限では、彼女の絵柄に近いものを一括りに『柏木エリ風』などと呼ぶ習慣まで浸透していて。

そこまで、今の彼女には、そこに付随するストーリーの力を借りずとも、ただその絵だけで人の心を大きく動かす力が備わっていて。

そこには、プロガデューサー的な言い方をすれば、大きな金になる力が、込められていた。

「だから、この話を請けるかどうか、さっきまで迷ってた。困ってた。

でも、さっき詩羽、言ってくれたよね？ 『次は何を作りましょうか？』って……

それって、一緒になって、ことだよね？」

「あ、あれは、ええと……」

でも、だからこそ詩羽は、ここ最近ずつと、彼女とコンビを組み続けることに、葛藤を抱えていた。

コンビを結成して、もう四年。

まるでペースを落とさず、ひたすら成長し続ける彼女を見つめ続けてきたからこそ、どうしても“もしも”を考えてしまう。

二人が、ずっと二人でいることが、本当に正しいのか、と。

いつか、自分こそが、英梨々のさらなる成長を、新たな世界への躍進を、阻害してしまうのでは、と。

けれど、そう思いつつも詩羽は、町田からの新作小説のオファーに、次も柏木エリと組むことを、当然のように、選択肢に入れていた。

もし彼女が OK を出してくれれば、他のイラストレーターを探す余地はないとまで思ってしまった。

その相反する気持ちを……

彼女の成長を邪魔したくないという理性と、彼女を手放したくないという欲求を同時に抱えたまま、はっきりした態度を取れずにいて。

だから、本当に、自分でも気づかないまま、欲望の方を口から自然に紡ぎ

出していて。

「さっきのあんたの言葉、本当に嬉しかった。
まだあたしを必要としてくれてるって、信じられたから。
一緒に戦ってくれるって、守ってくれるって、信じられたから」

「あ、あのね、聞いて英梨々。私は……」

「でもさ……だからこそ、
そろそろ独り立ちする時期なんだって、思い知った」

「……あ」

英梨々の、その言葉は……
詩羽の気持ちをまったく誤解して、曲解して、勝手に解釈して……
そしてその結果、詩羽が必死に決意しようとした方向へと、辿り着いた。

「あんたまだ、自分がいなきゃ、あたしが何もできなして思ってるんでしょ？」

だから、また一緒にやること前提だって、さりげなく気を使ってくれたんでしょ？

いつもみたいに、さ……」

だから詩羽は、その英梨々の決意に、返す言葉もなく。

「それは、そうかもしれないけどさ……
あたしはまだまだ、弱いままかもしれないけどさ……
だからこそ、あんたに甘えてばかりじゃ、いけないよね？
……いつまでも、あんたの伽に、なってちゃ、いけないよね？」

その、いつもながらの英梨々の、単純で、思い込みが激しくて……
だからこそ、強い決意と行動に、嬉しさと、安堵を覚えていた。

……身を引き裂かれるような寂寥感と、ともに。

「……コンビ、解消かしらね？」

「円満にね。発展的解消ってやつ？」

「あなたと組んでいると、簡単に売れるから楽なんだけれどね……」

「波島みたいなこと言ってんじゃないわよ。純血の創作馬鹿のくせに」

もちろん、そんな心情など、いつも通りおくびにも出さず、詩羽は、皮肉っぽくも優しい表情と言葉で、英梨々へのエールを送る。

そして英梨々は、きっとその奥底の心情になど届かずに、けれど詩羽の心の奥に届く言葉で応える。

「お互い、最強になりましょうね、英梨々……数えきれないくらいにまで武器を増やして。それとも、たった一つの武器を何もかも貫くまで鍛えて」

「あんたは、どっちに進む？」

「それこそ自分で決めることよ……人に甘えてないで、ね？」

「……そっか、そだね」

「同じ道かも、違う道かもわからないまま登り続けて、また、どこかで会いましょう？五合目か、八合目か、頂上か……」

「それがどこの高さかはわからないけどさ……でも、会おうところは決まってる」

「それって……」

「うん……『blessing software』でね！」

いつか、約束の場所で“皆と”ふたたび巡り会うために。

「オファー、来るかしら？」

「来るわよ絶対。だってこの前、恵から聞いたんだ。法人化したって」

「それはまた無謀なことを……」

「あいつが、倫也が、無謀じゃない決断をしたことある？」

「そればかりは、否定のしようがないわね」

「あいつが……諦めたこと、ある？」

「……まあ、そこそこあるけれどね」

「なら、信じない？ あいつの夢は、しよせん夢だと思う？」

「私が信じないと言ったって、あなたは耳を貸さないでしょう？」

もちろん詩羽は、口が裂けても『信じない』なんて言わない。
ただ……

「強くなったわね、英梨々……」

その、英梨々の決意と、約束を“仕方なく”信じる。

※

※

※

「……………」

「……………」

「……ねえ英梨々、今、何時？」

「ええと、二三時ね」

「ロードサービスに電話したの、何時間前だったかしら？」

「待つしかないんだからもっとドーンと構えてなさいよ！」

「……タイヤをドーンと溝に落とした人に言われたくないわね」

「ぐ……」

「ついでに、こんな人通りのない山道を選んだ人に言われたく……」

「仕方ないでしょ方角的にはこっちの方が近道のはずなんだから！」

「ナビの使い方も教習所で習っておくべきだったわね……」

街灯一つない、曲がりくねった細い田舎道には、さっきから他の車が通る気配すらなく。

車輪を溝に取られたままの暗闇の車内では、英梨々が操作するスマホだけ

が唯一の灯りだった。

「ま、ざとなったら紅坂朱音にでも連絡するわよ。あいつなら法定速度を遥かに超えて迎えに来てくれるでしょ」

「元病人をこき使うのやめなさい。それにあの女なんか呼び出したらいつの間にか企画に引きずり込まれてるわよ？」

「となればやっぱり、大人しく待つしかないじゃない。あんたも小説でも読んで時間潰してなさいよ」

「私、電子書籍にはまだ慣れないのよね」

「そろそろそっちも真面目に相手しないと取り残されるわよ？」

「で、あなたは何を読んでもの英梨々？」

「これ、あたしの最近のお気に入りなの！『幼なじみが絶対に負けないラブコメ』っていうタイトルなんだけど……」

「……あなた本当に強くなった？」

(了)